

レイモンド・カーヴァーの短編小説とフェミニズム 個人的なことは政治的なこと

著者	早坂 静
雑誌名	試論
巻	52
ページ	21-33
発行年	2017-10-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00121925

レイモンド・カーヴァーの短編小説とフェミニズム — 個人的なことは政治的なこと

早坂 静

2016年アメリカ合州国大統領選は、民主党ヒラリー・クリントン候補が優勢とされ、米国史上初の女性大統領の誕生なると注目が集まった。しかしながら、最終的には、共和党ドナルド・トランプ候補が国民やマスメディアの予想を覆して勝利した。初の女性大統領という、女性の経済的・社会的地位の向上を目指すフェミニズムの夢は実現しなかった。その卓越した経験と能力にも関わらず、ヒラリー・クリントンは「最も高いところにあり、最も硬いガラスの天井を破ることができなかった」のである(Hillary Clinton Concession Speech, 2016)。クリントン対トランプの対決の根底にあったのは、ジェンダーの問題ではなく、クリントンが代表し、経済のグローバル化を推し進めるエスタブリッシュメント対、トランプを支持する、グローバル化の負の影響を負っている、保守的なブルーカラー層という階級問題であった。しかしながら、トランプの勝因の鍵となった票田が、保守的な労働者階級と低・中層の中産階級から成るキリスト教福音派という、フェミニズムに反対し、女性や同性愛者を抑圧する価値観を持つ一大政治勢力であることに着目すれば、2016年の大統領選挙結果には、歴史的に女性解放の動きに歯止めをかけ抑圧するバックラッシュとしての側面があったことは否めない。このように、アメリカでは今日、フェミニズムに対するバックラッシュの再来が予想される。こうした時代に求められる批評とはどのようなものなのかを考える足掛かりとするべく、1980年代のバックラッシュの時代の小説とフェミニズムとの関係について、本稿では考察したい。

本稿では、カーヴァーの1981年に刊行された短編集『愛について語る

ときに我々の語ること』(以下『愛について』)を中心にカーヴァーの小説とフェミニズムの思想、取り組み、言説との距離感について分析をする。¹ 1970年末から80年代前半は、アメリカにおけるフェミニズムの一つの転換期と見なされる。スーザン・ファルーディは、1991年に全米批評家協会賞(ノンフィクション部門)を受賞した著書『バックラッシュ: 逆襲される女たち』の中で、アメリカの80年代は第2波フェミニズムに対する巻き返し(バックラッシュ)の時代であったと指摘する。1981年のレーガン政権発足を受けて、フェミニズムを取り巻く政治が右傾化し、特にキリスト教右派が母体となる「ニューライト」を中心に、伝統的な家族の価値などが強調され、人工妊娠中絶の禁止、同性婚の禁止などの実現が主張されるようになった。80年の共和党綱領はニューライトの主張に基づいて、人工中絶を禁止する憲法修正条項などを掲げ、男女平等を保障する憲法修正条項であるERA反対を唱えていた。そして実際、82年にはニューライトはERAをフィリス・シュラフリーの指導の下、廃案とするのに成功した。こうしたフェミニズムを取り巻く環境の転換期に執筆・発表されたカーヴァーの小説は、フェミニズムについて何かを示唆しているのか、示唆しているとすれば何を示唆しているのか、本稿では分析を試みる。

短編集『愛について』には家庭の内外における男性による女性に対する暴力が物語を駆動する鍵になっているものがある。「出かけるって女たちに言ってくるよ」という短編では、高校時代からの親友同士の二人組の男たちが、ゆきずりの二人の女性をレイプし、石で殴り殺す。「こんなにも家の近くに深い川がある」では、語り手である女性の夫が、釣りに行って、川で少女の水死体を見つける。この少女は強姦殺人されたことが示唆されている。語り手の女性は、この事件をきっかけにして、自分の少女時代に故郷の町で起きた、同じような少女殺害の事件のことを思い出す。「私の父が死んだ三番目の原因」では、耳の不自由な男が、ハンマーで妻を殴り殺して、自分は身投げしてしまう。「愛について語るときに我々の語ること」の中では、登場人物の一人の女性が、元配偶者の男にさんざん殴りつけられるという身体的暴力を振るわれる。カーヴァーの短編集『愛について』における女性たちに対する家庭内・外における暴力の描写の多さは、1970年代後半から80年代にかけて米国に存在していた、フェミニズムに対するバックラッシュの潮流と決して無関係ではないように思われる。ファルーディは、フェミニズムに対するバックラッシュの時代である80年代には、アメリカ社会において女性に対する暴力が激増したと指摘する。

家庭内暴力から逃れてきた女性のための保護施設では、収容者数が1983年から87年にかけて100%以上増加した。そして、政府の記録には、女性に対する性的暴力の急増が詳しく記載されている。通報されたものだけでも70年代初期に比べ2倍強に増えており、他の暴力犯罪の発生率のおよそ2倍、犯罪すべてと比べると4倍の率で発生していることになる。殺人事件の発生率が減少している一方で、性にまつわる殺人は1976年から84年にかけての8年間に160%増だ。こうした殺人は暴力社会に特有の通り魔殺人、あるいは動機のない無差別殺人とは違う。少なくとも女性被害者の3分の1は、その夫や恋人によって殺されているのだ。しかも、大多数が離婚請求の手続きや家出といった自立の意思表示をした直後に殺されている。(17)

1970年代にはアメリカ合州国では、第2波フェミニズムの思想を基に、男性による抑圧や暴力からの解放を目指す女性や、男性による庇護を求めない自立した女性を描く小説や映画が数多く創られた。このようなフェミニズムの女性表象と比べると、『愛について』においては、バックラッシュの世相を反映していることもあるとはいえ、男性による女性に対する暴力行為に満ち溢れ、一見したところフェミニズムの理想から著しくかけ離れているように見える。しかしながら、多くの先行研究はカーヴァーの小説とフェミニズムの思想や言説との親和性について指摘する。2009年にインターネット上で刊行された『レイモンド・カーヴァー・レビュー』第2号では、「カーヴァーとフェミニズム」という特集が生まれ、カーヴァー小説の中では、男らしさが定義し直されているという指摘や、男性中心的言説が批判されていて、言語が女性を力づけるものとして使われ、フェミニズムが支持されているといった指摘がされている (Zarranz 30, Fachard 10, Éigeartaigh 1-2)。本稿では、カーヴァーの小説の多くには相矛盾する二つのベクトル— 一方でフェミニズムに逆行し、他方ではこれを支えるという構造— が存在することに着目し、カーヴァーの小説に現れる、フェミニズムに対する微妙な距離感とアンビヴァレンスについて考察をする。本稿執筆者は、論文「リベラル・リアリズムとしてカーヴァーの短編小説を読む」(2015年)において、カーヴァー作品は、特定の政治的立場を強調することはなく、多様な政治的見解間の対立や矛盾をありのままに提示する、中道主義的なリベラル・リアリズムに基づいて成り立っていることを指摘した。² この見方をカーヴァーとフェミニズムとの関係を分析する際にも援

用したい。

I

短編集『愛について』の中の家庭内・外で女性に対して暴力を振るう男性登場人物は、皆共通して、誇張法を使って描かれていたりはそののだが、特段个性的であったりはず、アメリカの日常のありふれた風景の中で誰もがよく見かけるような平凡な男たちとして描かれている。「出かけるって女たちに言ってくるよ」では、物語の最後に、通りすがりの若い女性二人を襲い、強姦殺人を犯すという凶悪な行動に出るジェリーは、この野蛮な行為を犯す前には、田舎町で人並みの暮らしを送る人物として語られている。「ジェリーは二人の子供の幸せな父親で、ロビーズ・スーパー・マーケットの副店長に昇格していた」(49)。暮らしぶりもなかなかのもので、ジェリーは高台の上にある「立派な家に住んでいた」(49)。ジェリーの家には休日を楽しく友人たちと過ごすのによりバーベキュー・セットもあり、レコードも揃っていて、子供たちを遊ばせる庭も簡易プールもあったのだ(49)。小説の冒頭から、ジェリーという人物の平凡さは強調されている。ジェリーとその相棒のビルは、一見したところ並外れたことは目につかない、ありふれた少年時代を共に過ごす。

二人は町の南区域にある古い催しもの広場のそばで育ち、同じ小学校から中学校へ、そしてアイゼンハワー校へと進学した。二人は学校では可能な限りたくさん同じ先生の講義を選択し、互いのシャツやセーターやペグド・パンツを交換し、同じ女の子たちとデートしたり、寝たりもした。万事が万事そういう具合だった。

夏休みには二人は組んでアルバイトをした。桃の取入れをしたり、さくらんぼを摘んだり、ホップの筋をとったり、小銭が入って上役にガミガミ言われたりこづきまわされたりしないで済む仕事ならなんでもやった。それから二人は共同で車を買った。これからハイスクールの三年生になろうという夏に、二人は金を出しあってまっ赤な54年型のプリマスを325ドルで買った。

二人はそれを共同で使ったが、べつに問題もなくうまくいった。

しかしジェリーは1学期が終わる前に結婚し、学校を中退してスーパー・マーケットに就職した。

ビルの方もやはりその女の子とデートしたことがある。キャロルという名の娘だった。彼女とジェリーはうまくいっていた。(48)

少年時代からジェリーの生活の中心にあるのは、流行の衣服を身に着けること、中古車を購入しそのためにアルバイトに励むことや、異性との交遊であったことが、上記に引用した小説の冒頭部分から読み取れる。ジェリーは高校を中退しているとは言え、人並みに結婚し、就職し、家も子供も持っている「平均的なアメリカ人男性」であり、彼が犯した凶悪な行為の誘因は、一見したところ明らかではない。ただ、人物描写や言語を注意して分析すると、ジェリーが高校を中退し学歴を持たないがために、彼の社会的地位と経済力が低く限定的であること、また、そのために彼は将来に現状維持以上の展望が望めないといったことが、小説の終わりで彼が犯すことになる暴力行為の間接的な要因であることが見えてくる。また、上記の引用文の中で顕著であるのは、ジェリーとビルがしばしば同じ女性と付き合い、モノを消費するように様々な女性と一時的な関係を持つという、ホモソーシャル性とこの男たちによる女性蔑視である。これらの重要な要素も、ジェリーがゆきずりの女性たちに振るった暴力の根本にある。さらには、資本主義とリベラリズムが駆り立てる、富と消費と異性愛へのあくなき欲望を、ジェリーという人物が人一倍強く持ち合わせていたことが、彼の暴力行為の要因であるように読み取れる。こうした観点から言えば、ジェリーはいわば資本主義と家長長制下に生きる、現代の男性のデフォルメなのだ。現代の男性のデフォルメとしてのジェリーには、より高い社会的ステータスを指し示すモノを消費し続けることと、女性を男同士で共有し、支配することによってホモソーシャルな関係を良好に保つことの2点が、平凡で変化の起こりようのない生活の気晴らしであるように描かれる。

高校中退後、一家の稼ぎ手として3人目の子供を迎えようとする家庭を持ち、ささやかな暮らしを送るジェリーに、やがて翳りと倦怠が見られるようになる。ビルの結婚式の場面は、物語終盤でジェリーが起こす暴力行為の予兆を指し示している。結婚式では、「ジェリーとビルは二人で悪ふざけをしてはしゃぎまわり、腕ぐみをして、パンチ酒を一気飲みした。しかしそんな幸せのまっただ中で、ビルはふとジェリーの顔を見て、22歳にしてはあまりにも老けすぎているなど思った。そのときすでにジェリーは二人の子供の幸せな父親で、ロビーズ・スーパー・マーケットの副店長に昇格していた」(49)。二人は結婚後も家族ぐるみで親しく行き来をし、広

い庭のあるジェリーの家でほぼ毎週末共に過ごすようになる。ビルは、高校を中退せずに卒業し、大手の牛乳製造会社に就職し、州軍に入り、自前のミルク販売ルートを持つようになる。ビルはジェリーに比べ、経済・社会的な地位上昇の可能性のある立場にあった。ジェリーが事件を起こした日の彼の様子は次のように語られる。

事の始まりはそんな日曜日のジェリーの家だった。

女たちは台所でかたづけものをしていた。ジェリーの娘たちは庭にいた。プールにビニールのボールを投げこみ、歓声をあげ、溝を蹴散らしながらそれを追いかけていた。

ジェリーとビルは中庭のリクライニング・チェアに座り、のんびりくつろいでビールを飲んでた。ビルがだいたい一人でしゃべった。共通の知人のことや、ダリゴールド社のことや、彼が買おうとしているフォー・ドアのポンティアック・カタリナのこととかだ。ジェリーは物干し網やガレージの中の68年型シボレー・ハードトップをじっと眺めているだけだった。なんだかずいぶん沈み込んでるな、とビルは思った。こんな風に何かをじっと眺めたり、ほとんど口をきかなかったりするなんて。(50)

「愛について語るときに我々の語ること」や「大聖堂」といったカーヴァーの短編小説の中で、男性登場人物同士が語り合う場では、経済的・社会的地位の有無により、より雄弁な人物が決定されることを踏まえれば、ビルほどには将来的な展望のない、行き詰ったジェリーの抑うつ感と劣等感がここに読み取れる。このようなジェリーの鬱屈を晴らすために、ジェリーとビルは出かけて行き、最終的にはゆきずりの見知らぬ若い女性たちに暴力を振るうのである。このようにしてジェリーの人物像を見ていくと、前述したように、彼の凶悪な行為の誘因と見なされるような、顕著に個性的な経験や性癖などは彼にはない。ただ、資本主義体制の維持に求められる尽きることなき強烈な欲望を、そして家父長制の根本にあるホモソーシャルな欲望と女性嫌悪を、彼が人一倍強く持ち合わせていたようであることは指摘できる。そうであるとすれば、この小説で示唆されているのは、一個人の性癖からというよりも、資本主義と家父長制下の文化、社会、価値観といった構造から、ジェリーのしたような残虐行為は生まれ得るということではなからうか。アメリカの第2波フェミニズムは、女性の社会的・経済的抑圧は個々人の責任だけでなく、経済・社会の構造に起因するため、

状況の改善には社会的な取り組みと構造的な変革が必要であると主張してきた。³ こうした姿勢に基づき、70年代から80年代にかけて、フェミニズム運動は性犯罪やドメスティック・バイオレンス（以下DV）防止のための法整備を推し進めてきたのである。⁴ 一見すると、カーヴァーの『愛について』の短編集は、フェミニズムの理想からかけ離れた、男性による女性への暴力を中心的なモチーフとするものが多いのであるが、個々の小説における登場人物や談話などの構成要素と言語を吟味すると、アメリカにおける男性による女性の抑圧は、個別的なものであるというよりも、社会構造的なものであるという示唆が見えてくる。社会構造に起因する女性に対する暴力を改善するためには社会的・公的な対応が必要であるという、フェミニズムの理念の妥当性を支持する性質を、カーヴァーの小説は内包している。

II

「こんなにも家の近くに深い川がある」の中で繰り返し言及される男性による女性に対する暴力もまた、「個人的なもの」であるよりも、社会構造的、文化的、生物学的なものとして表現されている。この小説では、語り手の女性クレアの夫が友人たちと遠出して釣りに出かけ、川で少女の死体を見つける。死体のことを直ぐに通報するために5マイルの道を引き返すのを煩わしく感じた彼らは、死体をそのままにして、丸一日のんびりとキャンプをしながら自分たちの休日を楽しむ。通報後、彼らは死体の第一発見者として新聞の第一面に載り、妻であるクレアだけでなく、警察や社会から、少女の死亡への関与について、疑惑を持たれることとなる。最終的には少女を殺害した犯人が、クレアの夫とは別に逮捕されるのだが、この一件を通して、クレアは自分の夫の内にある、自分を含めた女性全般に対する無神経さや冷酷性や暴力性に気づき、強姦殺人事件の被害者の少女に自分を重ね合わせるようになる。そして最終的には、自分の夫や事件の犯人だけでなく、男性全体が密かに持ち合わせている、女性に対する暴力性や残虐性を意識するようになる。

語り手の女性クレアの夫とその友人たちの「人並み」の様子は、「出かけるって女たちに言ってくるよ」と同様に、この小説でも強調されている。彼らは、「一緒にポーカーをしたり、ボウリングをやったり、釣りに行っ

たりする仲間だ。毎年春と初夏がめぐってくると、彼らは釣りに行く。親戚まわりなんかに忙殺される前に暇を見つけて出かけるわけだ。彼らはきちんとした人々である。家庭を大事にするし、仕事もおろそかにしない。彼らの子供たちは、うちの息子のディーンと同じ学校に通っている。」と語り手は夫とその友人たちについて叙述する(68)。このような一見「きちんとした」普通の男性たちが、女性の死体を発見しても平然としてそれを放置し、その傍らで休暇の時間を楽しんだということが、女性に対する暴力を軽視する社会の病理を露わにしている。

語り手クレアの身辺には、男性による暴力が遍在している。夫が遺体の発見者となった事件をきっかけに、彼女はかつて自分の故郷の町で起きた残酷な少女殺人事件のことを想起し、空想の中でその事件で殺害された少女と自分を重ね合わせる。「『私の故郷の町で、彼らはアーリーン・ハブリイっていう女の子を殺したのよ。その女の子の首を切って、死体をクリー・エルム川に投げ込んだの。その事件は私がまだ小さなころに起こったの。』[.....] 私はクリークを見る。私はその中にいる。目を見開いて、うつ伏せになって、川底の藻を見ているのだ。死んだまま」(71)。クレアにとっては、「川」は男性による女性への暴力がまかりとおる場所、その暴力行為の証拠を隠蔽する場所の象徴となる。現在の自分の住む街でも、かつて故郷で起きたのと同じような少女に対する性暴力と殺人の事件が起きたのだ。クレアには、これらの事件は他人事のように思われぬ。自分だって運が悪ければ、人気のない川辺で、男に暴力を振るわれて、川に沈められていたかもしれないのだ。さらにこの後、語り手クレアはドライブ中にトラックを運転する男性に、しつこく付きまとわれ、身の危険を感じる事となる。運転中長い間後をつけられ、疲れ果てドアと窓をロックし車を止め休んでいると、トラックを運転していた見知らぬ男が引き返して来て、クレアに車の窓を開けると迫ってくる。この場面でも、男性に殺された少女たちと自分を重ね合わせる時のモチーフである、川についての言及がなされる。「樹木のずっと下の方から川の水音が聞こえる。やがてピックアップが引き返してくる音が聞こえてくる」(73)。最終的には、夫が遺体の発見者となった事件の犯人は夫ではないことが判明するのだが、クレアは夫に疑念を抱き続けている最中も夫よりも弱い立場にあり、夫の性的な要求を拒絶することができない。夫には飲酒癖があるようで、彼女は夫の飲酒時の暴力を警戒しているように描かれる。「[事件の被害者の葬儀に参列し]家に帰ると、スチュアートはテーブルの前に座っている。彼

の前にはウイスキーのグラスが置いてある。一瞬、私は頭が混乱してしまう。ディーン [息子] の身に何かが起こったのだと思ってしまう」(74)。夫の暴力を警戒しながら、小説の終わりでも、クレアは無気力に夫を受け入れる。この場面でも、男性の女性に対する暴力性を象徴する川のイメージが繰り返される。「それから [夫は] 何かを口にする。でも私にはそんなものを聞く必要はない。こんなにざあざあ川が流れているのだから」(74)。アメリカでは、夫婦間の強姦が全ての州で違法となるのは、90年代まで待たなければならない。この法の成立以前は、「家庭」は少なからぬ女性にとって、男性による暴力がまかりとおる「川辺」であったのだ。この法整備が成される前の、アメリカの夫婦間の力関係の不均衡と危うさが、この小説の語り手の夫婦に象徴されている。クレアにとって、川、すなわち男性による女性に対する暴力行為を許す場の象徴は、常に身近にあるものなのだ。

III

「私の父が死んだ三番目の原因」でも、家庭内暴力を振るう人物に焦点が合わされている。「ダミー」と呼ばれる耳の不自由な製材所の労働者が、自分の家にある池でバスの養殖を始める。ダミーはバスの養殖に没頭し、次第に周囲の人間関係から遠ざかるようになる。大きな体で悠々と回遊するバスの群れは、現実社会では周縁的かつ従属的な地位にあるために叶えられないダミーの支配欲や所有欲を、暗示する手段となる。ダミーはバスの群れを独占するために、池の周囲に塀を立て、金網を張り、釣りを許さない。ダミーがバスに深くのめりこむ一方、彼の若い妻は他の男性と遊び歩いている。そして、バスの養殖は長くは続かない。洪水が池のバスを川に押し流してしまい、ダミーは生きがいを失う。これをきっかけに、彼はすっかり人が変わってしまう。彼は心を閉ざし、仕事を休むことも多くなる。そうした中、彼は妻を殴り殺し、自分も池に身を投げて死ぬ。登場人物ダミーは一見障害を負い、趣味にのめり込むという点で、特殊な人物であるようにも見えるが、この小説で注目すべき点は、「出かけるって女たちに言ってくるよ」の登場人物ジェリーと同様に、ダミーという人物は、時の平均的なアメリカ人男性労働者のデフォルメとして表されていることである。以下の小説冒頭でダミーが紹介されるくだりにもそれは読み取れ

る。「つんぽであったにせよ、なかったにせよ、彼は 1920 年代から製材所で一般労働者として仕事をしていた。会社はワシントン州ヤキマにあるカスケイド製材である。私が知っているかぎりずっと、ダミーは掃除係として働いていた。そして彼の着ている服はいつもまったく同じだった。つまりフェルトの帽子、カーキのワークシャツ、つなぎの作業着の上にデニムの上着である」(76)。ダミーという人物は興味深いことに、仕事が便所掃除であったのにも関わらず、懐中電灯、レンチ、プライヤー、ドライバーといった機械工が持ち歩いているものを全部用意していたという。この登場人物の描写を 1970 年代から 80 年代の社会的文脈に置いて分析すると、この時代のアメリカの産業構造の変化のあおりを受けた賃金労働者を象徴しているように解釈できる。70 年代末から 80 年代にかけて、アメリカの多くの賃金労働者を襲ったのが産業の空洞化である。この時期からコンピュータによって代表される技術革新により、国外における高度な製造業の生産が可能となり、多くのアメリカ企業はコストの低い外国の工場から部品を購入したり、外国に工場を移し、そこで生産を行なったりするようになった。その結果、アメリカ国内都市において、多くの工場が海外移転し、また、レーガン政権下の新自由主義政策で雇用に関わる規制が緩和され、定職を失う労働者が激増した。「ダミー」は、こうした国内の産業の空洞化のあおりを受け、抑圧され、疎外された、70、80 年代アメリカの労働者を象徴しているように読むことができる。ダミーが、機械工の道具を携帯しているのは、すでに 70 年代末のアメリカでは失われた、一家の大黒柱たり、所有欲や支配欲の満たされた第 2 次世界大戦後の豊かなアメリカの労働者の男性性を、この人物が希求していることの暗示であろう。ダミーのよりどころのなさや満たされぬ思いは、不貞の妻への暴力行為として噴出する。そこには一定の理由があるとはいえ、経済的・社会的に抑圧され、疎外された男性が、より弱い立場にある女性に暴力を振るうという構図は、上記に見た「出かけるって女たちに言うてくるよ」と通底している。第 2 波フェミニズムの旗手であったベティ・フリーダンは、著書『セカンド・ステージ』(1981 年)の中で、レーガン政権期、ベトナム戦争後の政治的・経済的に不安定なアメリカで、女性が「生贖の山羊」とされ、より強い抑圧のもとに置かれることを懸念しているが、カーヴァーの小説の中の暴力的な男性登場人物はそうした構図を体現しているものと見る事ができるであろう。

ここまで、短編集『愛について』の中の短編小説3点（「出かけるって女たちに言ってくるよ」、「こんなにも家の近くに深い川がある」、「私の父が死んだ3番目の原因」）を分析し、カーヴァーの小説の中にはフェミニズムに対して相矛盾する価値観が含まれていることを確認した。一見すると、これらの短編群は、時のフェミニズムに対するバックラッシュを支持し、体现するような女性への暴力に満ちた物語なのであるが、これらの根底にはフェミニズムの理念の妥当性を支える、特徴的な語りが共通して存在している。登場人物の造形や談話や象徴といった小説特有の構成要素と言語を分析すると、アメリカにおける男性による女性に対する暴力や抑圧は、個別的なものというよりも、社会構造的なものであるということがこれらの小説では示唆されている。第2波フェミニズムは「個人的なことは政治的なこと」というスローガンを掲げ、女性が抑圧される状況を改善するために、社会的な取り組みと構造の変革を推し進めてきた。様々な小説の中の女性たちに対する抑圧を、社会構造的なものとして読む可能性と妥当性を模索し続け、女性を取り巻く状況改善のための社会的な取り組みの必要性を喚起し続けることこそが、アメリカにおける再三のバックラッシュの波が予期される2017年の今日のフェミニズム批評の役割の一つなのではないだろうか。

註

¹ 本稿では、『愛について』の村上春樹による翻訳書を一部改変した上で、引用した。

² 論文「リベラル・リアリズムとしてカーヴァーの短編小説を読む」において、本稿執筆者はカーヴァーのリアリズムをアメリカ文学史における「リアリズム」の系譜の中に新たに位置づけ、カーヴァーの短編小説の政治性と、それがいかなるテーマ設定、プロットや物語の構造から成り立っているかについて分析した。当該論考では、1940年代末から50年代末までの冷戦期初期においてアメリカを代表する文学批評家であった、ライオネル・トリリングのリアリズム観をカーヴァーが継承していることに着目した。トリリングは40年代から、反共（自由）主義思想を文学批評に持ち込み、独自のリアリズム論を展開した。アメリカの文壇では元々リアリズム小説とは左翼思想に基づいたものであるという共通理解が存在し、30年代にはこれらのリアリズム小説が文壇を席卷していたのであるが、文学界が反共主義に侵食される中、トリリングは論集『リベラルな想像力』の中でリアリズムの再定義を行ない、左翼的なリアリズム文学作品を否定した。特定の政治的なイデオロギーに頼らないレンズを通して捉えた現実こそがアメリカの現実であり、そうした現実を描くのがアメリカのリアリズムなのだと同著の中でトリリングは主張したのである。トリリングが提唱した新しいアメリカのリアリズムは、「道徳的リアリズム」と冠され、これは、従来

の革新主義的リアリズムのように解決すべき社会問題を主題とするのではなく、特定の政治思想に頼らずに現実を描くものである。本稿執筆者は、政治から一定の距離を保つカーヴァーのリアリズムは、特定の政治思想に頼ることをよしとしない、トリリング流の自由主義的かつ中道主義的な特徴を持つことを指摘した。さらにこの論考では、その思想的基盤は自由主義であるため、トリリングの提案した「道徳的リアリズム」を「リベラル・リアリズム」と呼ぶこととした。

³ アメリカ合州国でDVへの取り組みが始まったのは1970年代であり、家庭内でパートナーから暴力を受けた女性が逃げ込む「シェルター」と呼ばれる民間の保護施設が作られ始めた。1970年代以前には、DV被害者のためのシェルターや支援サービスは存在せず、刑事あるいは民事裁判所、警察、病院、社会福祉機関もDVを社会全体で公的に取り扱うべき問題とはみなさなかった。これらの公的機関はDVを「私的な問題」とみなした。80年代に入り、この問題に対する意識や認識が高まるにつれ、女性団体が被害者の安全確保を目指し、DVを生み出す社会の構造上の問題やDV防止のための法整備に焦点を合わせた「暴力を振るわれた女性たちの運動 (Battered Women's Movement)」と呼ばれる社会運動を組織するようになった。

⁴ 米国連邦議会が初めてDV問題に対処した法律は、1984年家庭内暴力防止・サービス法であった。この法律は、DVに対する一般の意識の向上を目指す州政府の取り組みを支援し、DV被害者用の避難所や支援サービスの資金を連邦予算から拠出することを目的としていた。

引用文献

- Carver, Raymond. *What We Talk About When We Talk About Love*. 1983. London: Vintage, 2009.
- Clinton, Hillary. "Hillary Clinton Concession Speech." <https://www.theguardian.com/us-news/2016/nov/09/hillary-clinton-concession-speech-full-transcript>. Accessed 12 Sep. 2016.
- Éigeartaigh, Aoillean Ní. "Space, Domesticity and the Everyday: Re-reading Raymond Carver's Women." *The Raymond Carver Review*, vol. 2, 2009, <https://dulux2871uqv.cloudfront.net/sites/default/files/file/I2-Eigeartaigh.pdf>. Accessed 29 Aug. 2017.
- Fachard, Vasiliki. "Four Female Voices in 'Fever': Introduction to Feminism and Carver." *The Raymond Carver Review*, vol. 2, 2009, <https://dulux2871uqv.cloudfront.net/sites/default/files/file/I2-Fachard.pdf>. Accessed 29 Aug. 2017.
- Faludi, Susan. *Backlash: The Undeclared War Against American Women*. New York: Anchor Books, 1991.
- Family Violence Prevention and Services Act, 42 U.S.C §§ 10402.
- Zarranz, Libe García. "Passionate Fictions: Raymond Carver and Feminist Theory." *The Raymond Carver Review*, vol. 2, 2009, <https://dulux2871uqv.cloudfront.net/sites/default/files/file/I2-Zarranz.pdf>. Accessed 29 Aug. 2017.
- 早坂静。「リベラル・リアリズムとしてカーヴァーの短編小説を読む」『人文・自然研究第10号』一橋大学大学教育開発センター、2015年。

レイモンド・カーヴァー。『愛について語るときに我々の語ること』村上春樹訳。中央公論社、1990年。